第85回選抜高校野球

済々黌 55年ぶり春へ ㊤

2013.3.13

考える野球

自主性重視 工夫重ねる

「判断、判断。よーく、考えろ」―。初春の青空が広がった6日、藤崎台県営野球場に、ノックバットを手にした済々黌・池田満頼監督の大声が響き渡った。昨秋の県大会以来、約5カ月ぶりとなる藤崎台の土の感触を確かめながら、選手たちは実戦形式の守備練習に汗を流した。

昨夏の甲子園の初戦、鳴門（徳島）との2回戦で、済々黌の代名詞「考える野球」が全国に知れ渡った。1点リードの七回1死一、三塁。打者が遊直に倒れ、「併殺で万事休す」と誰もが思った。しかし、ボールが一塁に転送される間に三塁走者が本塁を駆け抜けた。相手のアピールがなかったため、得点成立。ルールを熟知し、好判断が生んだ頭脳プレーだった。

進学校のため、有能な選手はそうは集まらない。「得点につながる可能性の高いプレーに活路を見いだす。55年前から変わらんよ」と、優勝した第30回大会の済々黌主将で元監督の末次義久さん(72)。勝つために必要なことは何かを一人一人が考えることは、代々受け継がれてきた伝統であり、強さだ。

チームは走者を置いた実戦形式のシートノック（ケース練習）に力を注ぐ。野手はアウトカウントごとに一、二塁や一、三塁など、さまざまな状況を想定し、ボールカットやベースカバーなど連係の確認を繰り返す。

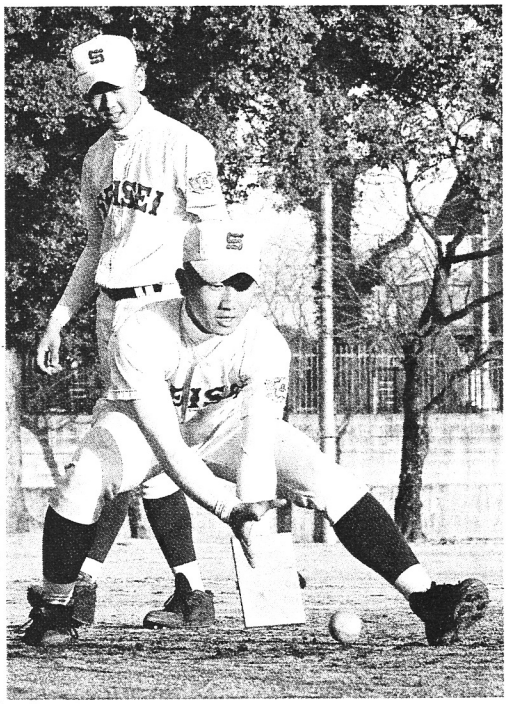
一方、走者は打球の強さや野手の位置によってスタートを切るのか、塁間で野手をけん制するのか、瞬時に判断しながら動きを体にたたき込む。「ケース練習を中心にやっているチームは全国でも珍しい。ここから鳴門戦のプレーは生まれたのか」。ネット裏で練習を見ていたプロ野球日本ハム・林孝哉スカウトは、納得した様子だった。

指揮官のモットーは「自主性を重んじる」。練習メニューは基本的に選手が決める。〝板捕り〟は昨冬、西昭太朗前副主将の発案で始まった。選手たちは板（縦約25センチ、横約15センチ）をグラブ代わりにノックを受けた。中川洸志主将は「腰をしっかり落とし、正面で捕らないと球をはじいてしまう。基本的な捕球姿勢や動きが身に付き、守備力が上がった」と振り返る。

「できることをどう行動に移すか。グラウンドで常に考え、工夫するしかない」。池田監督の指示は明快だ。深化させた「考える野球」で大先輩たちに続く栄冠に挑む。

◇

第85回選抜高校野球大会は22日開幕する。県勢の済々黌は55年ぶり4度目の出場。優勝した第30回大会以来の〝春〟に臨むチームとその戦力を紹介する。（坂本尚志）



〝板捕り〟を繰り返す選手たち。ボールを体の前でさばく練習にもなる＝済々黌グラウンド（谷川剛）